深田久弥
山の文化館だより
令和2年
春号

深田久弥　山の文化館
〒九二二―〇〇六七
石川県加賀市大聖寺番場町十八
TEL（〇七六一）七二―三三一一三
FAX（〇七六一）七二―一一八一

「嶺」と「岳」

大菩薩岳の名称についての話題です。国土地理院の地形図には「大菩薩嶺」となっていますが、『日本百名山』では現在「大菩薩岳」となっています。

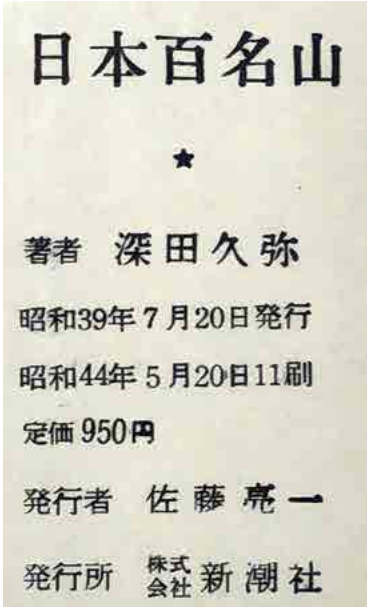
望月達夫氏は、武田久吉博士が大菩薩嶺の山名の誤りを指摘されている事を著書の中に書いています。武田博士は「ついでにいうが大菩薩岳とあるべき山に大菩薩嶺と官行の地図にあるため、誰も彼も嶺に行こうといって出かけていく。この字は大菩薩峠とある所に記すべきであった。嶺は峠を意味する漢字なのである。」と書かれています。

このことを深田久弥に書き送ってところ、折返し「大菩薩岳ご忠告ありがとう。次の版で訂正します。」とのハガキをもらった。

このような事情で「嶺」は「岳」に変わった訳であるが、それではと漢和辞典に当ってみた。大漢和辞典第四巻（諸橋轍次著大修館書店）では説明は漢文で分かりづらい。他に捜すと、新訂字統（白川　静著平凡社）には、同じ漢文をわりと平易に書かれていたので、前半を引用してみます。「声符は領（りょう）。領はえりくびをいう。〔説文新附〕九下に「山道なり」とあり、〔正字通〕に「山の肩領、道路を通ずべき者」とする。山頂をいう峰・頂に対して、そのかたそばを嶺というが、「峯嶺高峻」（こうれいほうしゅん）のように合わせていうこともある。」

この辞書の内容からして「岳」に軍配が上がると考えます。

では、どの版で変えられたのだろうか。ハガキの日付は昭和四十四年□月二十六日なので昭和四十四年以降の版を探した。昭和四十四年五月二十日付十一刷はまだ「嶺」だった。十二刷以降をまだ発見していない。



久弥と五万分の一地形図と赤鉛筆と　その9

今回の地形図は以前に登場した「赤石嶽」です。これは地勢図「甲府」の一六番です。

北は荒川岳から光岳までの南アルプス南部の地図です。何箇所も赤鉛筆のラインや書き込みがあるが、今回は聖岳に焦点を当ててみます。赤鉛筆のラインは、聖沢の出合から一四〇〇メートル辺りまで登り、トラバースぎみに進み聖沢を渡っている。そして、さらに二一〇〇メートルまで登っている。地図には登山道の記載はなく、現在の登山道とも違っている。聖沢上部の一六〇〇メートル辺りに半円の印が、二一〇〇メートルの聖沢沿いに小屋の印が鉛筆書きされている。聖平近くの沢の名前が二つ書き込んであり、もちろん聖嶽には赤鉛筆の太いアンダーラインがある。

これらの書き込みに対する作品はと探すと、『わが愛する山々』の「聖岳」があった。昭和三十五年五月二十九日から六日間の山行の模様を書いたものである。ジープでの送迎など、中部電力のサポートを受けアプローチは優雅なものだったようである。聖沢度を過ぎたところに東海パルプの聖事務所があり、行き帰りともここに泊まっている。この小屋の前からは、その年の一月に登ろうとして果たされなかった（『わが愛する山々』の「笠ヶ岳」に詳しく書かれている）、笠ヶ岳の連峰が綺麗に見えたそうである。また、聖平小屋にも行き帰り泊まっている。天候不順で茶臼岳まで足を延ばす予定は切り上げたが、一行は無事聖岳には登ることができ、六日間の旅を終えた。

『わが愛する山々』「聖岳」
『日本百名山』「聖岳」

この一冊

『竜頭索道』と題する本があります。長野県下伊那郡喬木村の教育委員会に電話して買い求めた物です。深田久弥が、昭和十年八月光岳に向かう時、飯田から上村程野まで乗ったのがこの索道だったからです。

読後感を寄せていただきました。皆様も、ぜひ一度目を通されてはいかがでしょうか。

『竜頭索道』を読んで

『竜頭索道』・・。意味も良く解らないままに頁を開くと、その当時の写真や地図、資料などに混じって、何とも温かみのある「座光寺　厚氏」（編集者の一人）による挿絵に目を奪われた。読み進むうちに、当時の人たちが伊那谷から遠山谷までの急峻な山道を、人馬に代わって主に木材を運ぶために、非常な努力をして作られた空中輸送機器だと解った。

深田久弥も「光岳」登山のためにこの索道を使ったことが記されている。「二人が索道の吊柄にしがみつきながら背中合わせに座り・・・」と続くのだが、何とも滑稽で恐ろしい情景が思い浮かべられる。

時には故障もあり、死亡事故もあった索道だが、大正から昭和の初期まで運航の後、時代の変遷を経て新しく自動車道や、トンネル開通などと進み、現在の喬木村となっているのである。

これは単なる資料ではなく、高齢となられた当時の方たちの話や、懐かしい道具の写真など、村民一同がここに記されている「温故知新」の教えをもって作り上げた貴重な一冊の本である。

（Y・K）

春のきざし

朝、門を開けて中に入ると、イチョウの枝の切れ端がいくつも落ちている。木口は真新しく綺麗である。何か??

聞くところによれば、三月はカラスの巣作りの季節なので、枝を折っていくときに出来た折れクズではないか、ということであった。偶然にも、カラスが枝を取っていくところを目撃した。それでなるほどと納得した。

聞こう会予定

月に一度、山に関わるお話を聞いています。ぜひご参加下さい。（聴講無料）

午後一時半より三時
深田久弥山の文化館聴山房

■五月十七日（日）
演題：白山開山の歴史
講師：白峰林西寺住職　加藤　彰教氏

■六月二十一日（日）
演題：白山の気象と観天望気
講師：石川県自然解説員研究会　山下　光信氏

■七月十九日（日）
演題：白山と写真と私
講師：石川県自然解説員研究会　荒牧　良一氏

読書会のお誘い

『日本百名山』など深田久弥の作品を読んで、山やその自然、文化について語りあっています。お気軽にご参加下さい。（参加無料）

五　月　十五　日（金）
『日本百名山』より「阿蘇山」
六　月　十九　日（金）
『百名山以外の名山五十』より「笈ヶ岳」
七　月　十七　日（金）
『日本百名山』より「至仏山」

●場所＝深田久弥山の文化館
●時間＝午後一時半より三時

＊詳細はホームページをご覧下さい

編集後記～

令和二年春号をお届けします。桜は例年通り策誇っていますが、新型コロナウイルスの蔓延で久弥祭の中止や臨時休館とすべてが変則的です。一日も早い終息を祈っています。